

序

*American Notes* (1842)は、1842年にチャールズ・ディケンズ(Charles Dickens, 1812-70)が行った旅の記録であり、大部分は彼がジョン・フォースター(John Forster, 1812-76)へ書き送った手紙に基づいている。ディケンズは、蒸気船ブリタニア(Britannia)号でリヴァプール(Liverpool)を出航した。家を離れて過ごす期間を快適にしようと、ディケンズ夫妻は、キャサリン(Catherine)の小間使いでいつも頼りになるアン・ブラウン(Anne Browne)を同行した。彼らは、ダニエル・マクリース(Daniel Maclise, 1806-70)が彼らの子供たちを描いた楽しいスケッチを持っていき、滞在したところへはどこでも、これを部屋の一番いい場所に飾った。生後11ヶ月のウォルター(Walter)も含めて、留守中の子供たちの世話は、ディケンズの弟フレッド(Fred)に委ねられ、キャサリンの妹で14歳のジョージーナ(Georgina)がこれを補佐することになっていた。その上で、マックリーディ(Macready)夫妻が全体的な後見役を引き受けた(James 51)。

アメリカに着いたディケンズは、大変な歓迎を受けただけでなく、多くの印象的な人物に出会う機会を得た。*Tales of the Grotesque and Arabesque*一冊をディケンズに謹呈したエドガー・アラン・ポー(Edgar Allan Poe, 1809-49)は、ユナイテッド・ステイツ・ホテル(the United States Hotel)に立ち寄るように招かれた。きらめく知性と取りつかれたような目を持つアメリカの詩人ポーに感銘を受けたディケンズは、7月にロンドンに戻ったら、ポーのために出版社を探すと約束した(Johnson 391-97)。<sup>1</sup>

一方で、国会にはとても顕著な人物が多くいた。ジョン・クインシー・アダムズ(John Quincy Adams, 1767-1848)<sup>2</sup>、ヘンリー・クレイ(Henry Clay, 1777-1852)<sup>3</sup>、ウィリアム・バラード・プレストン(William Ballard Preston, 1805-62)<sup>4</sup>、ジョン・カルフーン(John Caldwell Calhoun, 1782-1850)<sup>5</sup>などである。アダムズとクレイについてディケンズは、「アダムズはいい人だよ。76歳だが驚くべき活力、記憶力、迅速さ、勇気を持っている人だよ。クレイは、抗し難いほど魅力的な人だよ」(1842年3月15日)と表現している。ディケンズは、*American Notes*の中で印象的な人物について語っているが、一方で印象的な都市についても語っている。活力に富んだ、平等主義を掲げる新興国アメリカの都市について、ディケンズは、そこに住む人々や文化や社会制度をつぶさに観察し、母国イングランドと比較しながら描写している。ディケンズが語る印象的な都市は、果たしてディケンズの期待通りの都市であったのだろうか。そこには光がある反面、影の部分もなかったのであろうか。また、アメリカのそれぞれの都市は、一様にアメリカの文化を表しているわけではなく、それぞれ

の都市ごとに特徴を持っていて、そのことをディケンズは描写しているではなからうか。本論文ではこれらのことについて考えていきたい。

## 1. ボストン

ブリタニア号は、1月4日にリヴァプールを出航し、1月22日にボストンに到着した。1月22日にボストンに到着したディケンズは、とても歓迎され、顕著なボストンの人々と暖かい友情を育み、2月5日にボストンを去った。顕著なボストンの人々の中にはボストンの市長ジョナサン・チャップマン(Jonathan Chapman, 1807-48)、数学のハーバード(Harvard)大学の教授、詩人のヘンリ・ワズワース・ロングフェロー(Henry Wadsworth Longfellow, 1807-82)、かつぶくのいい、カキを愛するギリシア語の教授コーネリアス・フェルトン(Cornelius Conway Felton)がいた。ロングフェローは、ディケンズをすてきな、気さくな人物で、ディック・スウィヴェラー(Dick Swiveller)の快活さが少し見られると感じ、フェルトンは、ディケンズの大切な友人の一人となった(Slater 180)。ディケンズは、ボストンで人々に魅せられると同時に、都市にも魅せられた。彼は、ボストンを次のように表現している。

The city is a beautiful one, and cannot fail, I should imagine, to impress all strangers very favourably. The private dwelling-houses are, for the most part, large and elegant; the shops extremely good; and the public buildings handsome. The State House is built upon the summit of a hill, which rises gradually at first, and afterwards by a steep ascent, almost from the water's edge. In front is a green enclosure, called the Common. The site is beautiful: and from the top there is a charming panoramic view of the whole town and neighbourhood. In addition to a variety of commodious offices it contains two handsome chambers; in one the House of Representatives of the State hold their meetings: in the other, the Senate. Such proceedings as I saw here, were conducted with certainly calculated to inspire attention and respect. (26-27)<sup>6</sup>

この都市は美しく、初めて目にする人にはきつととても好ましい印象を与えるだろうと想像する。個人の住宅は大部分が大きく、洒落ていて、商店はとてもすばらしく、公共の建物は堂々としている。州議会議事堂は、丘の上に建てられている。その丘のすそは水際から始まり、そして徐々に高くなっていき、やがて険しい上りになっている。前には共有地と呼ばれる緑に覆われた囲い地があり、これも美しい。町全体と近辺の魅力的な全景が丘の上から見渡せる。そこには、広々としたさまざまな役所や会社の事務所に加えて、立派な議事堂が二つある。一つは州の下院、もう一つは上院で、そこでそれぞれ会議が行

われる。私がここで見た議事堂は全く荘重に礼儀正しく行われ、それは確かに見る者に注意と敬意を抱かせるように計算されていた。

ボストンという都市の美しさとすばらしさを讃えた上で、ディケンズは、「ボストンの知的洗練と優越性の多くは、確かに、この都市から3、4マイルの範囲内にあるケンブリッジ(Cambridge)の大学の目に見えない影響によるものである」(27)と述べ、ボストンの魅力の源泉の一つとして、マサチューセッツ州ボストン近郊のケンブリッジに位置するハーバード大学を挙げている。ハーバード大学は1636年に創設されたアメリカ最古の大学で、アイビー・リーグ(the Ivy League)<sup>7</sup>と呼ばれるアメリカ北東部の名門大学のグループの一つである。1639年、清教徒派の牧師ジョン・ハーバード(John Harvard, 16-7-38)が遺贈した財産と蔵書をもとにカレッジとして活動し始め、「ハーバード・カレッジ」という名称が用いられるようになった。

ディケンズは、ハーバード大学の教授たちについて、「彼らは、文明世界におけるいかなる社会にも恩恵を与え、また名誉となるような人たちであり、その点一人の例外も思い起こすことができない」(27)と述べている。元々は清教徒派の牧師による遺贈から始められたという奉仕の精神をディケンズがこの都市に敏感に感じとっているように思われる。それは、「特にマサチューセッツ州のこの首都の公共の施設や慈善事業は、思いやりにあふれた知恵と慈悲心と人間愛がなし得るほとんど完璧なものであると心から信じる」(28)と述べていることから窺える。

コーネリアス・C・フェルトンは、「本の厳粛な部分、すなわち、ボストン南部における視覚障害者の施設への訪問やローラ・ブリッジマン(Laura Bridgman)についての胸を打つ描写(第3章)、フィラデルフィアの独房システムに関する力強いコメント(第7章)などは真情があふれていて、真摯で熱意をもって書かれていて、最も共感を持って打ち震える真情から書かれている」と述べている(Felton 135)。ディケンズは、特にパーキンズ視覚障害者協会マサチューセッツ園(The Perkins Institution and Massachusetts Asylum for the Blind)に感銘を受けているように思われる。この施設の前身は、医者で盲人教育の先駆者であるジョン・ディクス・フッシャー(John Dix Fisher, 1797-1850)が設立したニューイングランド園(New England Asylum for the Blind)であり、「パーキンズ」という名前は、財政難に陥っていたマサチューセッツ園にトマス・パーキンズ(Thomas Handasyd Perkins, 1764-1854)が大邸宅を寄贈したことに敬意を表して付けられた。ディケンズは、アメリカの博愛主義者であり、奴隷制度廃止論者であり、盲人や知的障害者対策の先駆者であるサミュエル・グリドリイ・ハウ(Samuel Gridley Howe, 1801-76)博士の記述によって施設の説明をしている。視覚と聴覚を永久に失ってしまったローラ・ブリッジマンが訓練によって指話術用アルファベットを巧みに使えるようになる様や、同じく視覚と聴覚を失った少年オリヴァー・キャスウェル(Oliver Caswell)がローラに側にいてももらいながら指話術用アルファベットを使えるようになるための訓練の描写などはいかに施設が子供たちの心に希望を持た

せるのに役立っているかを示している。

ディケンズのボストンに関する印象は、慈善と関わっているように思われる。それは、次のような南ボストンに関する描写にも窺える。

At SOUTH BOSTON, as it is called, in a situation excellently adapted for the purpose, several charitable institutions are clustered together. One of them, is the State Hospital for the insane; admirably conducted on those enlightened principles of conciliation and kindness, which twenty years ago would have been worse than heretical, and which have been acted upon with so much success in our own pauper Asylum at Hanwell. (45)

南ボストンと呼ばれている所には、すばらしく目的にかなった立地環境の中、いくつかの慈善施設が集まっている。これらの一つは精神障害者のための州立病院で、慰めと思いやりという啓蒙的諸原則に基づいてみごとに運営されている。20年前だったら、その原則は異端という異常に悪いものであっただろうが、わが国のハンウェルの貧民施設はその原則に従って運用され、大きな成功を収めてきている。

引用の中のハンウェルの貧民施設というのは、ミドルセックスのノーウッドのハンウェル教区に1831年に建てられた施設であり、現在はセント・バーナード病院(St. Bernard's Hospital)となっている。精神障害者のための州立病院が母国の貧民施設と同じ慰めと思いやりという啓蒙的諸原則に基づいて運営されていると述べることによって、ディケンズがこの病院を高く評価していることが分かる。南ボストンの産業会館に隣接する建物の中にある孤児と幼い子供たちのための場所では、ディケンズは、壁の碑文をととても気にいる。彼が気にいる碑文の中の「互いに愛し合いなさい」(49)、「神は創造し給うた最も小さいものをもお忘れにならない」(49)などは、この施設が聖書の中の教えに基づいて運営されていることを示している。

南ボストンの施設で聖書に基づいて書かれた碑文を見てディケンズが気にいることから考えられることは、彼が隣人愛や神の恵みを伝えるということにキリスト教の理想的姿を見出しているということである。歴史的にはニュー・イングランドのキリスト教には厳格でときには残虐な側面があった。ピルグリム・ファーザー(Pilgrim Fathers)は、1620年にメイフラワー(Mayflower)号に乗ってイギリスのプリマスからアメリカのマサチューセッツ州プリマスに渡り、プリマス植民地を築き、その後ニュー・イングランドを築いた。<sup>8</sup>ニュー・イングランドでは、ピューリタンは自分たちの教会を純化し、互いに監視し合い、聖書に由来する法のもとで生きようと努めた。ジョン・ウィンスロップ(John Winthrop, 1558-1649)は、マサチューセッツを「丘の上の町」、つまり本国の目を引く改革された教会群たらしめよ、と植民者たちに熱心に説いた。理想的で統一された社会を求めたピューリタンたち

は、宗教的寛容や複数主義を擁護してはいなかった。ニュー・イングランドでは、カトリック、イングランド国教会信徒、バプティスト、クエーカーはお断りであった。(ロードアイランドは例外であった)。

魔女裁判も行われた。ニュー・イングランド人は、魔女、つまり傷つけ殺すために悪魔に自分の魂を売って魔力を得るとされる者、の脅威を感じていた。家畜や子供が病気になって死ぬといつも、ニュー・イングランド人は、同胞の誰かが悪魔の術を使ったと疑った。共同体の安全のために、魔女といえれば見つけ出して訴追し、無力化しなければならなかった。当局は自白して他の人に不利になる証言をした容疑者は赦免したが、有罪を宣告されても否認し続けるなら、その魔女は絞首刑に処せられた。ニュー・イングランドでは 93 人の魔女が訴追されたものの、処刑されたのは 16 人にすぎなかった。それも 1692 年までのことである。1692 年にマサチューセッツのセイラムで特異な熱狂状態が起こって、さらに 19 人が処刑された。<sup>9</sup>ピューリタンのニュー・イングランドは突出していた。その他のイングランド植民地では魔女裁判はほとんどなく、処刑もおそらく一切なかったからである。セイラムでも魔女狩りの暴発によって魔女裁判は信用が失墜し、その後、ニュー・イングランドでは行われなくなった(テイラー 101-2)。かつてのニュー・イングランドがどれほど厳格で残酷な側面を持っていたとしても、ディケンズは、先の碑文の文句に見られる隣人愛や神の恵みにこそキリスト教における救いがあると感じ取っていたのではなかろうか。

ここでディケンズが慈善事業に携わっていたことを思い起こしておきたい。ディケンズと「転落した女」(fallen women)との関わりにおいて忘れてはならないのが、ユレイニア・カテージ(Urania Cottage)である。これは、アンジェラ・バーデット・クーツ(Angela Burdett Coutts, 1814-1906)によって設立されたホームレスの女性たちの家であり、ディケンズも設立に尽力し、運営に携わった最も支持された慈善事業である。これは、シェパーズ・ブッシュ(Shepherd's Bush)の離れの家において 1847 年 11 月に始められ、1858 年までディケンズの積極的な管理の元で機能した。この家の目的は、売春や犯罪者層としての生活から逃避の場所を提供することにより、「転落した女」を救うことであった。特記しておきたいことは、ディケンズが *Oliver Twist* (1837-39)において悪徳たちの仲間として長く生活した売春婦であるナンシー(Nancy)のような女性でもイエス・キリストの赦しにより改心して第二の人生を送ることが可能であることを示していることである。このことから、ディケンズが南ボストンの施設が聖書の中の教えに基づいて運営されていることに共感を覚えたとしても不思議ではないのである。

ところで、ディケンズがボストンにイギリスからの知的影響を受けたグループがあることを記していることにも注意を向けたい。そのグループとは、超越主義者(transcendentalist)たちである。「理解できないことは、なんでも超越的である」(57)という説明に満足できなかったディケンズは、超越主義者たちは、彼の友人である「カーライル(Thomas Carlyle, 1795-1881)の信奉者」(57)であるということ、「カーライルを信奉するラルフ・ウォルド・エマソン(Ralph Waldo Emerson, 1803-82)の信奉者」(57)であることを知

る。

超越主義(transcendentalism)とは、ドイツ哲学、特にカント(Immanuel Kant, 1724-1804)の影響を受けてアメリカのニュー・イングランドに生まれた政治・宗教・社会・経済上の思想運動である。感覚経験を超越する事象を重んじて、個人的、ローマン的な立場に立ち、アメリカの独自性を強調した。超越主義の立場は、エマソンの *Nature* (『自然論』) に端的に窺える。エマソンは同志とともに、1836年、トランセンデンタル・クラブ(Transcendental Club)を結成し、季刊誌 *The Dials*(1840-44)を機関紙とした。トランセンデンタル・クラブは、1836年から7、8年間コンコードのエマソンの家やその他の場所で、ときどき非公式的に集合して、哲学・神学・文学を論じたニュー・イングランドの智者たちを局外者たちが呼ぶ名称である。その会員は、エマソン、ルイーザ・メイ・オールcott(Louisa May Alcott, 1832-88)、W. E. チャニング(William Ellery Channing, 1780-1842)、エリザベス・ピーボディ(Elizabeth Palmer Peabody, 1804-94)、H. D. ソロー(Henry David Thoreau, 1817-62)、ナザニエル・ホーソン(Nathaniel Hawthorne, 1804-64)などであった(福原、吉田 292)。

ディケンズは、エマソンが書いた一巻のエッセイ集に健全な特質や真実を感じ取り、「もし私がボストンの人間だったら、私は超越主義者になるであろう」(57)と述べている。このことから、ディケンズが超越主義者の知的性質に親近感を感じていることが窺える。

一方でディケンズは、ボストンでエドワード・トンプソン・テイラー(Edward Thompson Taylor, 1793-1871)の説教を聴く。メソジスト派の牧師テイラー氏は、船乗りであったが、聖職者になった人物である。ディケンズは、「栄光に包まれた天国へとまっすぐに舵をとって」(59)という説教の一部分を引用することによってかつて船乗りであった彼の特徴が説教に表れていることを示している。テイラー氏の説教に好ましい印象を受けたことを記すことによってディケンズは、ボストンの知的特質を示しているように思われる。随想録とも言える記述の中で、ボストンの隣人愛によって運営されている施設や知的特質を高く評価している。

ここで、ボストンを離れる前にディケンズが同じマサチューセッツ州にあるローウェルを訪問したことを付け加えておきたい。アンガス・ウィルソン(Angus Wilson)は、「チャールズ・ディケンズのアメリカ訪問の全行程の中で、おそらく最も楽しかったのは、ローウェルの新興工業都市を訪れたときであった」と述べている。そこで彼が見たものは、今日ならさしずめホステルに住む女工が程度の高い、女性らしい生活を享受しながら、堂々と自分たちの雑誌を出し、回読文庫を予約し、ピアノを弾いている姿であった。ウィルソンは、「ディケンズが、かねてから希望と賞賛とをもって描いていた姿とは、まさにこれであった」と指摘している(Wilson 163)。ディケンズは、寄宿舎に共同出資によるピアノがあり、ほとんど全ての女性たちが貸し出し図書館に出資していることにも新鮮な驚きを感じているが、特に彼を感心させたものは、*The Lowell Offering* (『ローウェルだより』)という定期刊行物であった。彼は、この定期刊行物について、「文学的産物としての *The Lowell Offering* の

価値について言えば、その日の辛い労働の後でこういう娘たちによって書かれたという事実を全く度外視したとしてもそれはおびただしい数のイングランドの年間刊行物と比べてもひけをとらないということだけを述べておこう」(69)と評価している。

ボストンにおいてもローウェルにおいてもアメリカの良い側面を見たディケンズであったが、彼はボストンを離れた後、アメリカの影の部分を見ていくことになる。次にアメリカの影の部分と結びついた他の都市について考えていきたい。

## 2. ボストンの後に訪れた都市

ボストンについての記述において見落としとしてはならないことは、国際著作権問題についての記述が欠けているように思われることである。このことをエリザベス・ジェイムズ(Elizabeth James)は感じ取っていて、「ディケンズは国際著作権についての言及を注意深く避け、その代わり、アメリカの社会制度や組織について長々と論じた」と指摘している(James 55)。

何とんでもディケンズが最も腹を立てたのは、アメリカが国際的な著作権協定へのサインを拒否していることだった。その結果、イギリスの作家はどれほど人気があったとしてもまたアメリカの出版社との契約の有無にかかわらず、自作を著作権侵害から保護することが不可能だったからである。このためディケンズは、アメリカ版については公正な支払いを受けていない。自分をこれほど手放しで歓迎してくれる国が依然としてこのような不正を大目に見ているのは、偽善的とは言わないまでも非礼と感じられた(James 53)。

1842年2月上旬に催されたボストンでのディケンズを歓迎するディナーにおいて、ディケンズは、国際著作権協定のメリットについて主張した。ディケンズは、文学が公正さに関するルールでもって保護されるべき財産であると主張した(Kaplan 127)。

2月5日にボストンを離れたディケンズ一行は、ウスターに着く。ディケンズは、ウスターを「ニュー・イングランドの美しい町」(71)と表現しているだけでなく、手厚いもてなしについても言及している。ウスターから一行は、南の方へ行き、ハートフォードに着く。そこでディケンズは、宴会でのスピーチで自身が書く上での民主主義的な精神を強調した。それは、あたかも聴衆と一体化しているかのようであった。それから正しい収入を不当にも奪われた作家の例として打ちひしがれて消耗してしまったウォルター・スコット(Walter Scott, 1771-1832)の例を挙げて国際著作権を求めて嘆願した。ディケンズのアメリカの友人たちは、アメリカにいる間、著作権を訴えることを思いとどまらせようとしたし、すでに彼を賞讃している人の手に噛みつかんとする決意に関して反対を表明する批判もあった(Ackroyd 369)。

ボストンだけでなくハートフォードに関する記述に関しても、ディケンズは、国際著作権問題について強く言及することを避けているように見える。彼は、「ハートフォードでのとても楽しい、愉快的思い出を私はいつまでも忘れないだろう。それはすばらしい場所で、私

は、そこで多くの友人を得た。彼らのことを思い出すと、とうてい無頓着な気持ちではいられない」(76-77)と述べているからである。

ところで、ディケンズの他にも国際著作権問題に取り組んだ人物がイギリスにもいたことを付け加えておきたい。ハリエット・マーティノー(Harriet Martineau, 1802-76)は、英米間の国際著作権法の実現を求める作家らの請願を取りまとめて、アメリカの有力者たちに送付した。これを受けて1837年2月には、アメリカ議会上院でケンタッキー州選出上院議員ヘンリー・クレイ(Henry Clay, 1777-1852)が、さらに下院ではニューヨーク選出下院議員チャーチル・キャンブレレン(Churchill Cambreleng, 1786-1852)が国際著作権法の提案を行ったが、会期中に法案を可決することはできなかった。イギリスでは1838年7月に国際著作権法(International Copyright Act of 1838)が制定され、外国で最初の出版された書籍の著者にも、勅令で認められた期間にイギリスで登録が行われた場合に著作権が与えられることになった。イギリスの1838年著作権法は、1844年と1852年には改正され、また著作権に関するヨーロッパ諸国と二国間条約も相次いで締結され、イギリスは国際著作権のより確かな保護に向けて前進した。一方、アメリカ議会による立法が19世紀末に至るまで実現しなかったことは、無関心ではなく、不作為によるものであったと述べている。アメリカでは、国際著作権やそれに関する二国間条約により得られる利益について懐疑的な意見が根強かった。当時のヨーロッパでアメリカ文化への需要は少ないと考えられたため、国際著作権を承認することによる互惠は期待できず、むしろ雇用や生産の減少を招くことが危惧された。<sup>10</sup>ディケンズの国際著作権問題への取り組みに障害があったとすれば、このようなアメリカにおける状況があったと考えられる。

ラリサ・T・カスティロ(Larisa T. Castillo)は、*Martin Chuzzlewit* (1844)を「ディケンズの国際著作権を否定したアメリカへの返答、すなわち、自らの作品に対して、正当な権利を保有しているという点をアメリカ人に訴えたいという気持ちの表れ」だと指摘している(Castillo 461)。カスティロが指摘しているように、*Martin Chuzzlewit*の中でディケンズは、自身の作品に対する権利を正しいものだと主張していると思われる。ペックスニフ(Pecksniiff)がマーティン(Martin)のオリジナリティーを自身のものとし、グラマー・スクールを完成させたことは、あたかもアメリカ人が国際著作権を無視して外国の作家の著作を転載していたことを暗示しているかのようなものである。すなわち、「マーティンの設計図=ディケンズの作品」、「ペックスニフ=ディケンズの作品を転載したアメリカ人」という構図が隠されていると考えられるのではなかろうか。

さて、ハートフォードからディケンズ一行は、鉄道と蒸気船を使ってニュー・ヘヴン経由でニューヨークへ移動した。<sup>11</sup>2月12日に彼らは、ニューヨークに着いた。そこで彼らは、3月5日までカールトン・ハウス・ホテル(Carlton House Hotel)で優雅に過ごした。カールトン・ハウス・ホテルを訪ねてきた人々の中には、ワシントン・アーヴィング(Washington Irving, 1783-1859)もいた。<sup>12</sup>後に *American Notes* の出版の後、アーヴィングは、ディケンズに反発し、彼のことを「服装、マナー、精神において卑俗な人物」と評した。しかし、



ディケンズが滞在中は友情が育まれたことは間違いない(Ackroyd 370)。

問題なのは、どうしてアーヴィングが *American Notes* 出版の後、ディケンズを悪く言うようになったかということである。これは、*American Notes* にはアメリカの良い部分だけでなく悪い部分も書かれているからであろうと思われる。

ニューヨークに関してディケンズは、通りの多くがボストンと同じ特徴を備えているとしながらも、「ファイブ・ポイント(the Five Points)と呼ばれている一角については、「不潔さと陰惨さの点では、セブン・ダイアルズ(Seven Dials)、もしくはあの有名なセント・ジヤイルズ(St Giles's)のいかなる場所とも互角に張り合えそうである」(80)と自国の例を引き合いに出して影の部分も述べている。ニューヨークの貧民者収容施設に関しては、「風通しが非常に悪く、明かりもひどい状態で、とても清潔とは言えなかった。全体として、とても不快な印象を受けた」(94)と語っている。そして「ニューヨークは大きな町で、そのような大きな町においては、巨大な量の善と悪が混じり合い、入り乱れているものだという事とも忘れてはならない」(94)と付け加えている。

一方でニューヨーク州のシン・シンとオーバーンの監獄に関しては、「サイレント・システムの最良の例」(95)としている。サイレント・システムとは、入獄中、会話、身振りなどによるコミュニケーションを禁じる制度である。ディケンズは、シン・シンとオーバーンのサイレント・システムを評価しているが、フィラデルフィアの独房監禁については評価していない。サчевェレル・シトウェル(Sacheverell Sitwell)は、「*American Notes* の最も良い部分は、フィラデルフィアの恐ろしい東部重罪監獄の描写である。それは、穏やかな調子で語ることが難しい恐怖の場所である」と述べている。シトウェルは、東部重罪監獄の描写が写実的であることを評価しているのだ。

ディケンズは、独房監禁の結果について、「残酷かつ誤ったもの」(99)と表現し、次のように自らの考えを伝えている。

In its intention, I am well convinced that it is kind, humane, and meant for reformation; but I am persuaded that those who devised this system of Prison Discipline, and these benevolent gentlemen who carry it into execution, do not know what it is that they are doing. I believe that very few men are capable of estimating the immense amount of torture and agony which this dreadful punishment, prolonged for years, inflicts upon the sufferers; and in guessing at it myself, and in reasoning from what I have seen written upon their faces, and what to my certain knowledge they feel within, I am only the more convinced that there is a depth of terrible endurance in it which none but the sufferers themselves can fathom, and which no man has a right to inflict upon his fellow-creature. I hold this slow and daily tampering with the mysteries of the brain, to be immeasurably worse than any torture of the body: and because its ghastly sins and tokens are not so palpable to the eye and

sense of touch as scars upon the flesh; because its wounds are not upon the surface, and it extorts few cries that human ears can hear; therefore I the more denounce it, as a secret punishment which slumbering humanity is not roused up to stay. (99)

その目的においては、その制度は優しく人間味あるもので、そして矯正を目指したものであることは十分納得がいく。しかし、監獄懲罰というこの制度を考案した人たちやそれを実行する慈悲深い方々は、自分たちが行っていることがどういうことであるかが分かっていないと私は確信する。数年に及ぶ恐ろしい懲罰が受刑者に与える、想像を越えた責め苦と苦悶を押し量ることのできるものはまずほとんどいるまい。私自身その苦しみを推測するに、また受刑者たちの顔に描かれているものからあるいは、私が知る限りの彼らが心中感じているものから押し量るに、受刑者たち自身以外には誰も計り知ることのできない、また、いかなる人と言えども、自分の同胞に課す権利など絶対に持っていない、恐ろしい忍耐の深淵がそこにあることをいっそう確信するだけである。このように毎日じわじわと頭脳という神秘に干渉することは、身体に加えるいかなる拷問よりも計り知れないほど悪い結果を生むものであると思う。なぜなら、その恐ろしい罪やしるしは、肉体に加えられた傷のように目で見たり、手で触れたりすることができないからであり、またその傷は表面に現れるものでもなく、耳に聞こえるような鳴き声を上げさせるというものでもないからである。それだけにいっそう私はそれを非難する—それはその人の眠っている人間性を目覚めさせたりすることの決してない、誰にも知られることなくなされる罰だからである。

引用は、独房監禁が人を生きながらにして葬られた状態にし、眠っている人間性を目覚めさせることもない点を示している。ディケンズは、結論として、「囚人たちがお互いに言葉を交わさずに一緒に働くことを認める「サイレント・システム」に比べて、そのような独房監禁が矯正の手段として優れた効果があるとは私はみじんも思わない」(110)と述べている。仕事を求め発作的に仕事に打ち込む人物や庭で働いているとき外壁の門がたまたま開けられたままになっていたので、外へ向かって駆け出す靴屋などは、*A Tale of Two Cities* (1859) のマネット(Manette)医師を創造する上で着想を与えたと思われる。

マネット医師は、フランスのボーヴェー(Beauvais)の医師だったが、サン・テヴレモンド(St. Evrémonde)侯爵兄弟の秘密(弟が農民の娘をレイプし、娘も弟も死んでしまったこと)を知ったため、バステューユ監獄に幽閉されていた。18年の及ぶ監禁状態の後ずっと自身の秘密を心の中に隠し持った状態にあった。今やパリで昔の召使ドファルジュ(Defarge)夫妻の家に引き取られたマネット医師は、かつてイギリス人の妻と娘がいたのを忘れたかのように、自身を精神的監禁状態においやり靴つくりで没頭している。このようなマネット医師は、長い間精神的に死んだようになっていたが、彼の状態は、娘が彼の目の前に現れることによって変化する。「わたしはね、おじさまをお迎えに来ましたの。そしてこれからイギ

リスに行って、二人で楽しく平和に暮らしましょうね」(44)と言い、<sup>13</sup>父親の混乱した心理状態に入り込むとき、父親は激しくすすり泣き、「嵐の後に来る静けさ、『生』という嵐が最後に行きつかなければならぬ休息と静寂という、いわば人間性についての表象」(45)の中にぐったりとなる。精神的監禁状態の中にあり絶望的な状況にあっても希望を見出すマネット医師の描写は、ディケンズが東部重罪監獄訪問で見た実例から着想を得たと推察される。



*The Shoemaker by 'Phiz'*

フィラデルフィアでアメリカの影の部分を見たディケンズは、<sup>14</sup>ワシントンでも影の部分を見てしまう。彼は、ワシントンにおいてタバコを噛み唾を吐くという二つの忌まわしい習慣の流行については、不愉快さを表明している。またボルティモアでは奴隷に給仕され奴隷制度の存在を感じ、「恥と自責の念でいっぱい」(114)なる。ディケンズは、フレデリックスバーグからリッチモンドへの汽車の中においても奴隷制度に直面する。汽車の黒人専用車両に、買われたばかりの母親がいて、父親と離れ離れになって子供が泣き続ける様を見た彼は、独立宣言で標榜されている「生命、自由、幸福の追求」が実現されていないと感じる。



*Black and White* by Marcus Stone

リッチモンドに着いたディケンズは、約 1,200 エーカーのプランテーションを訪れる。農園所有者と一緒に「クォーター」(the quarter) (農園の中の奴隷が住んでいる場所) に下りて行った彼は、奴隷たちが住んでいる小屋が見すばらしい小屋であることに気づく。また、せつせと働く哀れな奴隷の姿を目にする。それでも、農園所有者が 50 人の奴隷を遺産として相続しただけであり、「親切な心を持った立派な人である」(135)と確信する。奴隷所有者の中にも親切な心の持ち主もいることを示している点で、ディケンズの目は公平であると言える。アメリカにおける奴隷制度については、同じ州でも人によって考え方が異なっていた。サウス・カロライナ州のチャールストンの行政官ジェイムズ・ハミルトン・ジュニア

(James Hamilton Jr.)は、奴隷の反逆は、主人が奴隷に対して慈愛の心を持って扱うことや識字率の上昇にあると考え、家族主義を批判した。一方で、同じサウス・カロライナ州のチャールストンのバプテスト派教会の牧師リチャード・ファーマン(Richard Furman)は、家族主義を支持するだけでなく、奴隷の宗教上の教育の必要性を唱えた(Ford 114-15)。ディケンズは、彼が出会った農園所有者については、奴隷に対して家族主義に近い扱いをしていると考えたと推察される。

シンシナティを訪れたディケンズは、この都市を「美しい都市で、心地よく、繁栄し、活気に満ちている」(162)と表現している。<sup>15</sup>彼は、到着した翌日行われた「禁酒大会」の催しに好ましい印象を受けている。このことは、彼が *Sketches by Boz* (1833-36)の末尾で貧困な労働者階級に蔓延する飲酒の悪弊をひどく嘆いていることと、*The Pickwick Papers* (1837)でサム・ウェラー(Sam Weller)の義理の母親がメソジスト派に入れ込んでいて、禁酒協会の月例会に出席していることを描いていることを思い起こさせる。労働者の犯罪や常習欠勤という問題を解決するためにイギリスで行われた禁酒運動をディケンズも支持していて、アメリカでの禁酒大会を目にし、好ましく思ったと推察される。

見落としてはならないことは、ディケンズがアイルランド人を見て嬉しい気持ちになることである。彼らは国の象徴としての豎琴とマシュー(Theobald Matthew, 1790-1856)教父の肖像を頭上高くに掲げ、自分たちだけで一つの確固とした社会を形成し、緑のスカーフをつけながら、一団となって固い絆を示している。この描写は、アイルランド人たちが1838年にコーク絶対禁酒協会(The Cork Total Abstinence Society)の会長になったマシュー教父の運動を守り通すことによって民族的主張をしていることを示している。<sup>16</sup>

ディケンズは、キリスト教の影響力がセント・ルイスにも及んでいることを示している。初期のフランス人移住者たちによってセント・ルイスに持ち込まれたローマ・カトリック教は、広い範囲に浸透している。数ある公共施設の中にイエズス会のカレッジがあり、「聖心女子」修道院があり、カレッジ付属の大きな礼拝堂もある。さらに、聖フランシスコ・ザビエル(Saint Francis Xavier, 1506-52)に捧げられたローマ・カトリックの大聖堂もある。一方でユニテリアン教会が貧しい人々を友と見なし、いかなる派閥的な利己的な見方をする事なく、理性的な教育を目指して援助していることを示している。ディケンズは、このユニテリアン教会を「全ての活動において自由主義的で、思いやりある体制を取っており、全ての人々に広く慈愛の門戸を開いている」(175)と述べ評価している。ユニテリアン教会についてのこの表現は、カナダでモンリオールのカトリックの大聖堂について、またケベックでカトリックの慈善施設について述べてはいるが、具体的に様子を表現していないことと比べると、かなり積極的な評価の表現と言ってもいい。

ニューヨークに戻ったディケンズは、ニュー・レバノン(New Lebanon)のシェイカー(Shaker)村を訪ねる。シェイカーは、イギリスからアメリカに渡ったクエーカー(Quaker)の一派で、キリストの再臨を信じる人々である。イングランドからニューヨークに移住したアン・リー(Ann Lee, 1736-84)によって創設された。「シェイカー」とは、「体を振る者」という意味で、礼拝式にこの動作を取り入れたことかたこの名がある。ディケンズはシェイカー教徒を優れた農夫であり、誠実で公正な取引を行うということで評価しているが、「私はシェイカー教徒を好きになれない」(217)と心情を吐露している。その理由を彼は、「生命から健康的な美点を奪い取り、円熟と老齢から楽しい心の装いをむしり取り、生存というものをただ墓場に向かうだけの狭い道にしてしまっている」(218)と述べている。このように述べることで、ディケンズは、信仰心は尊いが、生きる喜びを奪うようなものであってはならないという自身の考えを表明している。随想録とも言える記述の中で、ディケンズは、理想的なキリスト教のあり方をも示している。

## 結び

以上、*American Notes* でディケンズがいかに印象的な都市について語っているかみついで考えてきた。ディケンズは、ジェイムズ・スペディング(James Spedding)が「第3章におけるディケンズの報告は、諸施設に関してニュー・イングランドの人々が文明的な世界を主

導していることを示している」と述べているように(Spedding 127-28)、ボストンとその諸施設についてとても評価している。ディケンズは、ボストンという都市の美しさとすばらしさを讃えるだけでなく、施設においては基督教の隣人愛が背後にあることをも感じ取り、そのことについても触れている。また、ボストンを離れる前に訪れたローウェルでも進歩的で文化的な女性たちを見て、アメリカの良い側面を感じ取っている。

ところがディケンズは、ボストンの後に訪れた都市に関しては、良い面だけでなく悪い面をも伝えている。ニューヨークではボストンと同じ特徴を見出しながらも、「ファイブ・ポイント」と呼ばれている一角については、不潔さと陰惨さを感じている。また、フィラデルフィアの東部重罪監獄に関しては、独房監禁が人間性を目覚めさせない点で良くないやり方だと意見を述べている。さらに、ワシントンでは、タバコを噛み、唾を吐くという二つの忌まわしい習慣の流行については、不愉快さを表明している。奴隷制度には心の底から反発し、奴隷に給仕されたボルティモアでは激しい恥の念に襲われる。

一方でディケンズは、シンシナティでは「禁酒大会」の催しに良い印象を持っている。彼は、参加しているアイルランド人を見て、とりわけ嬉しい気持ちになる。ディケンズはこの箇所でもカトリックではあっても、基督教の影響を示している。ディケンズは、シンシナティだけでなくセント・ルイスにおいても基督教の影響を示している。特筆すべきことは、ユニテリアン教会が全ての人々に隣人愛を施していると評価していることである。このことは、ディケンズの考える理想的な基督教のあり方を示している。一方で、ニューヨーク州ニュー・レバノンのシェイカー村を訪れた彼は、シェイカー教徒を優れた農夫であり、誠実で公正な取引を行うことで評価しつつも、禁欲的すぎる部分を好ましくないと感じ、それを述べている。

都市に関する随想録という観点から見ると、*American Notes*における都市の描写を通してディケンズは、それぞれの都市の良い部分だけでなく悪い部分も浮き彫りにし、それぞれの都市ごとに特徴を持っていること、さらには理想的な都市のあり方や理想的な基督教のあり方をも示している、と断言していいだろう。

## 注

- 1 バルティモア(Baltimore)でディケンズは、エドガー・アラン・ポーと会って文学について長く語り合った。彼は、ポーから *Tales of the Grotesque and Arabesque* を贈り物としてもらったポーは、ディケンズを賞讃していて、*The Pickwick Papers* の狂人の手記に影響を受けていた(Kaplan 135)。
- 2 第6代アメリカ合衆国大統領。父親は、第2代アメリカ合衆国大統領を務めたジョン・アダムズ(1735-1826)。

- 3 ケンタッキー(Kentucky)州を代表してアメリカが州国下院およびアメリカ合衆国上院両院の議員を務めた。
- 4 1849年から1850年まで第19代アメリカ合衆国海軍長官。
- 5 民主共和党に所属した。雄弁ではあったが、しばしば立場を変えることがあった。国家主義者、保護貿易の提唱者として経歴を始め、奴隷制度の擁護、少数派の権利拡大などを訴えたことで知られる。
- 6 Charles Dickens, *American Notes and Pictures from Italy* (New York: Oxford UP, 1987), pp. 26-27. 以下、引用文はこの版により、引用末尾の括弧にページを示す。日本語訳の部分は、伊藤弘之、下笠徳次、隈本貞広訳『アメリカ紀行』(岩波文庫)を参考にした。
- 7 リーグを構成する8大学は、ブラウン大学(Brown University)、コロンビア大学(Columbia University)、コーネル大学(Cornell University)、ダートマス大学(Dartmouth University)、ハーバード大学、ペンシルヴェニア大学(The University of Pennsylvania)、プリンストン大学(Princeton University)、イェール大学(Yale University)である。
- 8 ピューリタン(清教徒)とピューリタニズム(清教主義)について付け加えておきたい。エリザベス1世(Elizabeth I, 1533-1603)治下のイギリス国教会(Church of England, Anglican Church)に不満で、カルヴァン(Jean Calvin, 1509-64)の説を奉じたイギリスのプロテスタントをピューリタンと言う。この名は、彼らが教会の墮落した形式儀礼の「粛清」(purification)を叫んだことから反対派がつけたあだ名であったが、後には非難の意味はなくなり歴史的用語となった。メイフラワー号(Mayflower)号に乗ってアメリカ大陸に逃れたピューリタン(ピルグリム・ファーザー)は、アメリカ精神の支柱を築いたと言われ、またイギリスでは17世紀にクロムウェル(Oliver Cromwell, 1599-1658)らの共和国建設に失敗したが、18世紀以後イギリス人の倫理観との中心となったものは、ピューリタニズムと言われる(福原 吉田 231)。
- 9 ここで魔女狩りについての歴史を付記しておきたい。ほとんどの魔女狩りは、ドイツやアメリカ植民地のようなプロテスタントの諸地域で、行われた。教会の神学者たちが女性に嫌疑をかけ、異端を追求し、悪魔学を非難することによって女性の魔女という観念を作り始めたのは、ようやく15世紀になってからだった。中世、すなわち15世紀より前に魔術を使ったことを理由に処刑された女性は、ただ一人だけである。1324年アイルランドのキルケニー(Kilkenny)の酒場で女給をしていたミーズのペトロニラ(Petronilla de Meath, c.1300-24)は、彼女の雇い主であるアリス・キットラー(Alice Kyteler)夫人によって、悪魔に犠牲を捧げ、教会を傷つけ、毒薬を醸造したとして訴えられた。実はキットラー自身も魔術のかどで訴えられ、故郷を逃れたのだが、不運なペトロニラの方が逮捕され、審理にかけられ、拷問を受け、そして火やぶりにされた。彼女の裁判は、しばしばヨーロッパにおける最初の魔女裁判とみなされている。15世紀になってから教会の神学者たちは、「自然魔術」、つまり善なる目的のために利用できて、もっぱら学識ある男性が用いる

魔術を承認する一方、女性が使う魔術は、そもそもが悪魔崇拝的で反キリスト教的で異端として罰するべきものと考えた。魔女が使う魔術を、中世初期の呪術、すなわち誰もが使えて必ずしも悪魔と結びつかない術から、女性だけが使えて悪魔崇拝的な害悪魔術という、よく知られた形へと変質させたのは、他にもない教会公認の異端審問官だが、その大半はドイツのドミニコ会士だった。彼らの中でよく知られているのは、*Formicarius* (『蟻塚』) を 1436 年に著したヨハネス・ニーダー(Johannes Nider, c.1380-1438)と、1486 年に *Malleus Maleficarum* (『魔女への鉄槌』) を著したハインリヒ・クラマー(Heinrich Kramer, 1430-1505)である。この二人を含む 15 世紀の著述家たちの著作は、魔女狩りに欠かせない根拠と手段を提供したが、それは中世のことではなく、近世になってからのことである (ブラック 313-17)。

- 10 チェイス法の成立について付記しておきたい。1886 年 1 月、ロードアイランド州選出上院議員ジョナサン・チェイス(Jonathan Chace, 1829-1917)が、国際著作権を認める法案を議会に提出した。審議の過程で様々な修正が加えられはしたものの、この内容が原点となる法案は 1891 年 2 月に両院で可決されて、国際著作権法 (通称「チェイス法」) が成立した。同法は、書籍らの著作物について著作権を求める者が、一定の条件を満たすことにより、国籍にかかわらず著作権を認められることを規定した。著作権を得るためには、出版地の国内外を問わず、著者は発行日またはそれ以前に出版物を議会図書館に提出することが要求された。印刷された書籍については、アメリカ国内のタイプセットで印刷されたものであることが条件として課せられた。著作権のある外国の書籍の輸入は、私的的目的の場合及び著者の同意書がある場合を除いて禁止された(鈴木 22)。
- 11 ニュー・ヘヴンでディケンズとキャサリン(Catherine)は、滞在中、2 時間のレセプションを 2 回持たなければならなかった。それらのレセプションで彼らは、200 人から 300 人に至る人々と握手をしなければならなかった(Slater 182)。
- 12 ディケンズは、アーヴィングとはすでに文通をしていた。彼ら一緒に夕方を過ごした(Ackroyd 370)。
- 13 Charles Dickens, *A Tale of Two Cities* (New York: Oxford UP, 1991), p.43. 以下、引用文はこの版により、引用末尾の括弧にページを示す。日本語訳の部分は、中野好夫訳『二都物語』(新潮社)を参考にした。
- 14 ディケンズは、フィラデルフィアにあるクエーカー教徒の病院については、「それが施す大いなる恩恵において宗派に偏るところはない」(98)と評価している。
- 15 シンシナティは、ディケンズが訪れたときには、人口約 5 千人の都市であった (Sitwell viii)。
- 16 禁酒運動に関しては、後のヘンリー・エドワード・マニング(Henry Edward Manning, 1808-92)の運動も付け加えておきたい。カトリックのアイランド人に対するマニングの風紀改善・社会統制の事蹟のうち、特に重要なのは禁酒運動である(勝田 62-61)。彼はアイランド人が、アイランドの守護聖人である聖パトリックの祭日 (3 月 17 日) に



飲酒して騒動を起こす傾向があったことに注目し、1867年に「聖パトリックの休止(Truce of St Patrick)」の標語を掲げて彼らに3日間の断酒を呼びかけ、その一方でローマ教皇と交渉し、成功したものに贖宥状を発行する(ただし、告解などの手続きの上で)との約束を得た。マニングは続いて、1872年に救世軍型の組織に基づく「十字架同盟(the League of the Cross)」を設立し、ロンドン市内で独特のコスチュームをまとったパレードを組織するなどして、断酒を禁酒に拡大する運動を展開した (McClelland 200-203)。

#### Works Cited

- Ackroyd, Peter. *Dickens*. London: Minerva, 1990.
- Castillo, Larisa T. "National Authority in Charles Dickens's *Martin Chuzzlewit* and Copyright Act of 1842." *Nineteenth-Century Literature*. Ed. Saree Makdisi, Thomas Wartham. Berkley: U of California, 2008: 435-64.
- Dickens, Charles. *American Notes and Pictures from Italy*. New York: Oxford UP, 1987.
- . *A Tale of Two Cities*. New York: Oxford UP, 1991.
- Felton, Cornelius. "A Review in *The North American Review* (January 1843)." *Dickens: The Critical Heritage*. Ed. Philip Collins. London: Routledge and Kegan Paul, 1971: 130-31.
- Ford, Lacy. "Reconfiguring the Old South: "Solving" the Problem of Slavery, 1787-1838." *The Journal of American History*. Vol. 95. No. 1. Ed. Edward T. Linenthal. Lillington: Edwards Brothers, 2008: 95-125.
- James, Elizabeth. *Charles Dickens*. New York: Oxford UP, 2004.
- Johnson, Edgar. *Charles Dickens: His Tragedy and Triumph*. Vol. 1. Boston: Little, Brown and Company, 1952.
- Kaplan, Fred. *Dickens: A Biography*. London: The Johns Hopkins UP, 1998.
- McClelland, Vincent Allan. *Cardinal Manning: his public life and influence 1865-1892*. London: Oxford UP, 1962.
- Sitwell, Sacheverell. Introduction to *American Notes and Pictures from Italy*. New York: New York: Oxford UP, 1987: v-x.
- Slater, Michael. *Charles Dickens*. London: Yale UP, 2011.
- Spedding, James. "A Review in *The Edinburgh Review* (January 1843)." *Dickens: The Critical Heritage*. Ed. Philip Collins. London: Routledge and Kegan Paul, 1971: 124-29.
- Wilson, Angus. *The World of Charles Dickens*. Harmondsworth: Penguin Books, 1970.
- 勝田俊輔、「19世紀ロンドンのアイルランド移民—複眼的・長期的視点から」、『ヴィクトリ

- ア朝文化研究』第 17 号、日本ヴィクトリア朝文化研究学会、2019: 53-72.
- 鈴木健司、「アメリカの文学的独立と国際著作権—1891 のチェイス法への過程—」、『同志社女子大学 学術研究年報』、第 71 卷、同志社女子大学、2020: 15-27.
- テイラー、アラン、『先住民 vs. 帝国 興亡のアメリカ史—北米大陸をめぐるグローバル・ヒストリー』、橋川健竜（訳）、京都、ミネルヴァ書房、2020.
- 福原麟太郎、吉田正俊、『文学要語辞典 改定増補版』、研究社、1987.
- ブラック、ウィンストン、『中世ヨーロッパ ファクトとフィクション』、平凡社、2021.

*American Notes as the Memoirs of the Cities*

YOSHIDA, Kazuho

Charles Dickens (1812-70) and Catherine, his wife, sailed from Liverpool on 4 January on board the steamship *Britannia*. For comfort during their absence of six months, they took with them Catherine's maid, the ever-reliable Anne Brown, and a delightful sketch of the children by Maclise which was given pride of place in their room wherever they stayed.

After a wretched voyage during which they were all extremely seasick, they arrived in Boston to a tumultuous welcome. People lined the streets whenever he went out; they cheered him at the theatre, deluged him with messages of congratulation; they besieged the hotel. In Boston, Dickens formed warm friendships with a number of prominent Bostonians. Among them were the city's mayor, Jonathan Chapman, several Harvard Professors, and the poet Henry Wadsworth Longfellow (1807-82).

Dickens was fascinated by not only the Bostonians but also the city. He mentions University of Harvard as one of the sources of charm of Boston. The Perkins Institution and Massachusetts Asylum for the Blind made a deep impression on him. Dickens explains the institution by the description of Samuel Gridley Howe (1801-76), who is an philanthropist, an abolitionist, and a pioneer of measures to deal with blind and intellectually disabled person. The account which has been published by Dr. Howe, describes the rapid mental growth and improvement of Laura Bridgeman. Dickens's impression about Boston seems to have a relationship to charity. At south Boston, several charitable institutions were clustered together. One of them, was the State Hospital for the insane; admirably conducted on those enlightened principles of conciliation and kindness. Dickens also mentions the transcendentalists, the group influenced by Thomas Carlyle (1795-1881), his friend. Transcendentalism is a philosophical movement that developed in the late 1820s and 1830s in the eastern United States. Transcendentalism emphasizes subjective intuition over objective empiricism. Dickens seems to feel an affinity with the transcendentalists. In Lowell he discovered that the factory girls were not ashamed to produce their own magazine, to subscribe to a circulating library, to play the piano. It was what Dickens had thought of the United States with hope and admiration.

However, Dickens increasingly began to feel that everything had been pulled down. The first rifts appeared when he referred publicly to the Question of International Copyright. He, and indeed many other English writers, felt bitterly about this. He

seems to avoid referring to it strongly. In New York, Dickens points out the filth and the wretchedness of the Five Points. In Philadelphia, he thinks that the system of the prison called Eastern Penitentiary is rigid, strict, and hopeless solitary confinement. In Washington, the two odious practices of chewing tobacco and expectorating displeased him. In Baltimore, he felt ashamed of slavery. What has to be noticed that Dickens appreciates the great Temperance Convention led by Theobald Mathew and the neighborly love by the Unitarian church, while he does not like the ascetism of the shakers of the Shaker Village although he recognizes their sincerity and fairness of trade. From the perspective of the memoires of the cities, Dickens reveals not only the good sides but also the bad sides of the cities and shows the nature of ideal cities and ideal Christianity.

